浮世絵落語公演
～過去の実績～

（企画・構成・台本は三遊亭竜楽）

①落語/浮世絵
～伝統と現代の出会い～

②北斎漫画で笑おう！

③愛の浮世絵

①落語/浮世絵

～伝統と現代の出会い～

2016年12月パリ日本文化会館において、“世界で最も美しい浮世絵”と言われるボストン美術館のスポルティングコレクションの名作浮世絵画像を使用して大ホールで連続公演を行なった。
パリ市内に貼られたポスターは連日のように剥がされ、両日ともほぼ満員の大入りであった。会館が実施した当日の観客アンケートでは否定的評価がゼロであり、“パリっ子が「まあまあ」と言ったら大成功”と言われる芸術の都でという出色の評価をいただいた。

〈ゲスト〉牧野健太郎（元NHKプロデューサー/NHKがスポルティングコレクションをデジタル化した際の最高責任者）
この企画は、フィレンツェ・ケルン・東京・仙台などでも行われ、令和元年度文化庁芸術祭参加公演でもその一部が披露された。

パリ公演ポスター

パリ日本文化会館

日経新聞
2017年5月7日付

海外で爆笑呼ぶ 落語家 三遊亭 竜楽さん

どこでも絶対ウケる

発信
再発見ニッポン

真っ白な壁には西洋画が飾られ、背面にはパイプオルガン。寄席とはかけ離れた雰囲気にもかかわらず、落語家の三遊亭竜楽さん（58）は3月、イタリア・フィレンツェで古典の「ちりとてちん」を始めた。

■　□

「チェルト（もちろん）、チェルト」。目を細めて苦々しい表情をつくると、聴衆約120人は涙を流しながら笑った。「この珍妙を食べたことがあるか」と腐った豆腐を差し出された知ったかぶりの男が客を下ろすと、「イタリア人は笑いすぎて困る。少し抑えて演じないと」。

英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語……。8カ国語で日本の伝統芸能を輸出する。昨年5月には中国・浙江省で初めて中国語を披露。これまでの海外公演は9カ国、約170回を数える。

中央大法学部で法曹界を目指していた。「親の期待に応えようと、レールの上を走ってきた」。ただが4回挑戦しても司法試験をパスできず、26歳の時に脱線を決意。積み上げてきたものをご破算にするなら、と好きな落語の世界へ飛び込んだ。

師匠の故・五代目三遊亭円楽さんはテレビで落語を広めたパイオニアの一人として知られる。1992年に真打ちになった後も師匠の「人がやらないことをやれ」という教えが重くのしかかっていた。

転機は2008年に訪れた。イタリアでの公演依頼。語学が得意でもないのに、わらをもつかむ思いで「イタリア語でやりますよ」と調子よく引き受けた。

「言葉の習得は毎回、地道な作業の繰り返しだ。母語とする人に協力を依頼し、翻訳した演目をテープに吹き込んでもらう。少しずつカタカナで書き起こして単語を確認する方法で覚えていく。

一つの演目を2週間で完璧に身に付ける。翻訳を引き受け、海外公演に同行するフランス人アーティスト、シリル・コピーニさん（43）は「芸を大事にするからこそ、妥協せずにやり遂げる」とみる。

■　□

異国では試行錯誤の連続だが、得がたい経験もある。8年前のナポリ。突然、セリフが出てこなくなり、表情による語りでしのいだ。アチもなく日本ならば失態だが、拍手が湧いた。

落語は扇子や手ぬぐいを使ったしぐさと演者の表情が、時に言葉以上の効果を発揮する。「落語は『演じる』もので、半分はお客さんの想像力が作り出す」と気づいた。

日本固有の文化を言葉で説明すればするほど、わかりづらくなることもある。表情やしぐさを重ねて「自国の文化の延長線上で考えてもらう」という。例えば、キセルを知らなくても扇子をくわえれば、たばこのようなものと理解してくれる。

「想像力は世界共通」と、日本の寄席でも「演じる」意味を一層かみしめるようになった。

沈黙を嫌う米国人には「間」をあまり嚙まず、議論好きなドイツ人にはしぐさで考えるきっかけをつくるなど、お国柄に合わせる工夫も。「どこにでも行って現地の言葉で演じます。どこでも絶対にウケる」と自負する。

なぜ、そこまで自信があるのか聞いてみた。「だって落語は『笑わない人たち』と世界でいわれる日本人を笑わせる伝統芸能ですから」

文　筒井 恒
写真　柏原敬樹

東京新聞
2017年9月15日付

聞　東京新聞　2017年9月15日　第3種郵便物認可

和の懸け橋

「落語の笑いには世界の人たちを癒やす力がある」。二〇〇八年から毎年、海外で落語公演を続ける三遊亭竜楽（59）はそう感じている。使用するのは英語にフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、中国語。渡航先の言語で口演し、字幕も通訳も付けないスタイルを貫いてきた。これまで九カ国の約五十都市で約百七十公演を重ね「お客さんは思い思いに想像を膨らませながら笑っている。落語の深さを感じます」と語る。

上2013年、ドイツ・ライプチヒの大学で開いた公演
下浮世絵を背景に演じた昨年12月のパリ公演

毎年、海外公演 三遊亭 竜楽（59）

「世界の人々を笑わせ、癒やしたい」と話す三遊亭竜楽＝東京都渋谷区で

7カ国語 旅する落語

「七カ国語落語」の原点は、イタリア・フィレンツェ。日本で留学生を相手に落語を指導したこともあり、その縁から日本文化を紹介するイベントに参加した。そこで短気とのんびり屋の対照的な二人のやりとりを描く「気の長短」、知ったかぶりをする男に腐った豆腐を食べさせようとする「ちりとてちん」の滑稽噺を披露した。

「外国語を話せないし、字幕を施す予算もない」。苦肉の策だったが、噺をイタリア語訳し、それを丸暗記した。オーバーな表情と身ぶりも交えて一席披露すると、会場は大爆笑に包まれた。芸術の巨匠や大家を避難する「マエストロ！」という歓声も飛んだ。

評判は口コミで広まり、欧州の日本文化研究者らから公演依頼が舞い込むようになった。学校や病院など、さまざまな場所が即席の寄席になった。「日本の伝統芸がもっと評価され、きちんとした公演として認知されるように尽くしたい」と願い、落語を海外に広める活動を続ける。演目には「味噌豆」「親子酒」といった「シンプルで、どの国でも起こりそうな内容、身近に感じてくれそうな噺」を選ぶ。観客の笑うツボや反応の仕方にお国柄を感じるという。イタリアは「ブラボー！」などと騒ぎながら大笑いし、スペインやポルトガルは口笛を吹いたりしてゲラゲラ笑う。フランスは笑いこそ少なめだが、凝視しながら独特の舞台芸を鑑賞する熱気を感じる。

「一番難しい」と思うのが米国。顔を左右に向けて人物を演じ分ける決まり事も、事細かに説明する必要があるという。

「演じる上で大切なのは観客の想像力をかき立てる表現力。『お堅い』とか『つまらない』とか思われがちな日本人が大笑いさせることが重要」といつも全力投球だ。二〇二〇年東京五輪・パラリンピックを「日本ファンを増やす好機」ととらえる。最近は欧州で人気のある浮世絵を高座の背景に使うなど工夫を凝らしている。

今月はドイツを回り、十一月に米公演も控える。不穏な空気が漂う最近の国際情勢に「落語が世界の平和に役立つないだろうか」と思案する。

「他人や他国のことを想像しない人たちが争いを起こす。耳で聞いて想像して楽しむ落語を世界の人たちに味わってもらえれば、世界を穏やかにできるんじゃないかなぁ」

（藤浪繁雄）

フィレンツェ公演ポスター

②北斎漫画で笑おう！

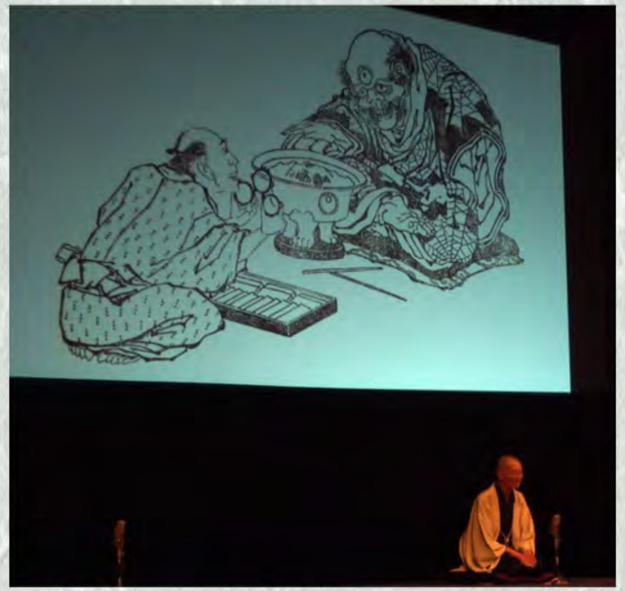
2023年2月 前橋市民会館で“世界一の北斎漫画コレクター”浦上満氏の北斎漫画をデータ（TOPPAN提供）画像との共演した企画「北斎漫画で遊ぼう！」を開催し、浮世絵鑑賞の機会がほとんど無い地方都市としては異例の700人の観客を動員した。北斎漫画イベントの新たな道を切り拓いた。

〈ゲスト〉浦上満（浦上蒼穹堂主人）

この企画を元にしたコンテンツ「北斎漫画で遊ぼう！」(漫画家ゴロ画伯がアレンジ）は昨年の三遊亭竜楽ヨーロッパツアーでイギリス（ロンドンジャパンハウス）フランス（パリ日本文化会館）スウェーデン（ストックホルム大学）などの9公演で披露された。

前橋公演ポスター

前橋公演　舞台



上毛新聞

（第三種郵便物承認）

落語と北斎漫画の世界

前橋 竜楽さん軽妙な語り

円楽さんしのぶ会 機に実現

江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎が描いたデッサン集「北斎漫画」と落語を融合させた催しが4日、前橋市の昌賢学園まえばしホール（市民文化会館）で初めて開かれた。同市出身の落語家、三遊亭竜楽さんがスクリーンに映し出されたユーモラスな画像に合わせて軽妙に語り、来場者約600人に笑いを届けた。

お座敷遊びを楽しむ竜楽さん（右から2人目）と来場者

北斎漫画は北斎が200人以上いた弟子のために手がけた絵の手本集。当時の江戸をさまざまな視点から描いた4千ほどのデッサンが収録され、庶民の暮らしが生き生きと表現されている。北斎が55歳のときに発刊されると人気を呼び、海外でも高く評価されている。

竜楽さんは、釣り人が魚ではなく人間を釣り上げる北斎漫画「釣りの名人」や、職人が大きなおけの製作に取り組む富嶽三十六景の一つ「尾州不二見原」などを解説。最後は富士山に登った男たちが次々と罪を告白する古典落語「富士詣り」を披露し、会場を沸かせた。

多文化理解促進を目指して竜楽さんとユニットを組むスウェーデン出身の三遊亭好青年さんが、英語で日本文化を解説。ぴょうぶを挟み、トラなどのポーズをとってじゃんけんするお座敷遊び「とらとら」の体験や、北斎漫画コレクター、浦上満さんの講演もあった。

市が主催。2022年9月に亡くなった六代目三遊亭円楽さんをしのぶ会で、竜楽さんと山本龍市長が話したことがきっかけで実現した。竜楽さんは「共にまえばし観光大使を務めた円楽が背中を押してくれて実現した。楽しく過去を学びましょう」と話した。（佐藤秀樹）

③愛の浮世絵

2025年千代田区立内幸町ホールにおいて、オフェルシャガン氏提供の質・量ともに世界一を誇るシャガンコレクションの春画データを使って、春画の文化的価値を追求するアート企画
「～落語家の語りで楽しむ～愛の浮世絵」を実施。
R15指定で行った公演は、京都祇園から芸妓舞妓衆が応援に駆けつけて踊りを披露し、満員札止めの大入りで話題を呼んだ（札幌市でもプレイベントを実施）

〈ゲスト〉オフェル・シャガン（実業家・古美術研究家～朝日新書・平凡社などで著作多数）
春画の評価は海外の方がはるかに高く、次回は7月4日に六本木のクラブハウスで外国人観光客も視野に入れた番組を開催する。

東京公演ポスター

シャガン・コレクション

札幌

東京

朝日新聞（東京版）

人間の性愛を描き、浮世絵の普及とともに、大名から庶民まで楽しまれた江戸時代の春画を題材に、落語家の三遊亭竜楽さん(66)の語りで楽しむ「愛の浮世絵　入門編」が28日、千代田区の内幸町ホールで開かれる。

竜楽さんは欧米、中国を回り、8カ国語で公演してきた「国際派落語家」。浮世絵と落語を組み合わせた話芸を2016年にパリ日本文化会館で初めて披露し、好評を博した。

今回の催しでは、古美術研究家のオフェル・シャガン氏が収集する春画を大型画面に投影し、竜楽さんの語りで演出。露骨な性表現に偏った作品は避け、漫画家・ゴロ画伯のトークも交えて、日本文化や美しさ、面白みに焦点を当てた作品を選んで構成しているという。竜楽さんは「エレガントでおしゃれな大人のエンターテインメントを楽しんでもらいたい」と話す。

午後6時半開演。当日4500円（前売り4千円）。予約・問い合わせはオフィスまめかな（03・5447・2215）へ。（上田学）

春画入門　落語家の語りで

三遊亭竜楽さん　千代田で28日

北海道新聞
2024年12月14日付

北海道新聞　2024年（令和6年）12月14日（土曜日）　サタデーどうしん 18

「春画」落語で読み解く

浮世絵の「春画」を落語の語りとともに鑑賞するイベントが6日、札幌市中央区のシアターZOOで開かれた。暮らしの中の愛の営みを描く春画について、国内外で活動する落語家の三遊亭竜楽が「単なるポルノグラフィティとの誤解がある。春画の魅力を語りの力で立体化させたい」と、初めて企画。小劇場の客席を埋めた人たちを楽しませた。

竜楽は群馬県出身の66歳で、1992年に真打昇進。2008年の海外公演以降、現地の言語による落語を字幕・通訳なしで披露し、フランスの日仏交流イベントでは浮世絵と落語の魅力を伝えるステージにも立った。今回、イスラエル出身の世界的な春画コレクター、オフェル・シャガンさんから「春画のポジティブな評価をもっと国内外で広めて」と、作品1万点超の画像データを提供され、開催にこぎつけた。

春画は特に江戸時代、富裕層から庶民まで広く親しまれた。あからさまな性描写がない作品も多い。竜楽は、亡き夫の墓石を抱く妻や、神様に見守られた出産、獅子舞の体に隠れて抱き合う男女などの作品を大型スクリーンに映写。落語のように、多彩な声色で描かれた人々の思いや会話を「再現」して楽しませた。

男性同士、女性同士が仲良くする作品も。竜楽は「江戸の日本はLGBTQなどの性的少数者に寛容な先進国。差別せず描いた」と紹介。夫婦が登場する落語「短命」「お化半七なれそめ」も披露して、会場を沸かせた。

このほか、「ライブ漫画家」のゴロ画伯が自作の漫画を映写して、江戸の暮らしや風俗を解説。「洒落」という言葉を端緒に、春画の底流にあるユーモアとエレガンスについても、ひもといた。

今回は、春画の「入門編」と位置づけた。竜楽は「新しいことに寛容な北海道・札幌を皮切りにできて良かった。日本全国、そして世界でこのイベントをやっていきたい」と話していた。（大野日出明）

男女が仲良くする春画を題材に語る三遊亭竜楽。「夫婦生活を前向きに捉えた春画の紹介は、婚活や少子化対策にも役立つ」

札幌でイベント　江戸の人間模様 多彩な語り

軽妙な語りを交えた「ライブ漫画」で江戸の風俗を紹介するゴロ画伯

北海道新聞電子版

浮世絵の春画、読み解く楽しさ　札幌で三遊亭竜楽企画の鑑賞イベント　落語の語りとともに

大野日出明　会員限定記事　2024年12月14日 5:01　北海道新聞 DIGITAL　あとで読む

男女が仲良くする春画を題材に語る三遊亭竜楽。「夫婦生活を前向きに捉えた春画の紹介は、婚活や少子化対策にも役立つ」

浮世絵の「春画（しゅんが）」を落語の語りとともに鑑賞するイベントが6日、札幌市中央区のシアターZOOで開かれた。暮らしの中の愛の営みを描く春画について、国内外で活動する落語家の三遊亭竜楽が「単なるポルノグラフィティとの誤解がある。春画の魅力を語りの力で立体化させたい」と、初めて企画。小劇場の客席を埋めた人たちを楽しませた。

竜楽は群馬県出身の66歳で、1992年に真打昇進。2008年の海外公演以降、現地の言語による落語を字幕・通訳なしで披露し、フランスの日仏交流イベントでは浮世絵と落語の魅力を伝えるステージにも立った。今回、イスラエル出身の世界的な春画コレクター、オフェル・シャガンさんから「春画のポジティブな評価をもっと国内外で広めて」と、作品1万点超の画像データを提供され、開催にこぎつけた。

春画は特に江戸時代、富裕層から庶民まで広く親しまれた。あからさまな性描写がない作品も多い。竜楽は、亡き夫の墓石を抱く妻や、神様に見守られた出産、獅子舞の体に隠れて抱き合う男女などの作品を大型スクリーンに映写。落語のように、多彩な声色で描かれた人々の思いや会話を「再現」して楽しませた。

男性同士、女性同士が仲良くする作品も。竜楽は「江戸の日本はLGBTQなどの性的少数者に寛容な先進国。差別せず描いた」と紹介。夫婦が登場する落語「短命」「お化半七なれそめ」も披露して、会場を沸かせた。

軽妙な語りを交えた「ライブ漫画」で江戸の風俗を紹介するゴロ画伯

このほか、「ライブ漫画家」のゴロ画伯が自作の漫画を映写して、江戸の暮らしや風俗を解説。「洒落（しゃれ）」という言葉を端緒に、春画の底流にあるユーモアとエレガンスについても、ひもといた。

今回は、春画の「入門編」と位置づけた。竜楽は「新しいことに寛容な北海道・札幌を皮切りにできて良かった。日本全国、そして世界でこのイベントをやっていきたい」と話していた。